

---

# ~×デジモンファーチャーズ×~

大学芋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「デジモンファーチャーズ」

### 【NNコード】

N6773X

### 【作者名】

大学芋

### 【あらすじ】

時は2032年…

デジタルワールドでは、新種のデジモンによって崩壊の危機に陥っていた。

そんな中、デジタルワールドに危機を感じたデジモン達は、現実世界に住む子供達に助けを求める。

今、現実世界とデジタルワールドを股にかけた冒險が始まる……！

## 「プロローグ」

「？？？」

「」は「デジタルワールド」のどこかにある森の中、そこに2つの影が…

そのうちの一人は黒髪の青年で、ゴーグルを首にかけている。もう一人は茶髪のオールバックの中年男で、あごにひげを生やしている

黒髪の青年「本当に一人で大丈夫なのか…？」

茶髪の中年男「なんだお前？おれが死ぬとでも思つているのか？」

黒髪の中年男「…しかしおまえ一人では心配だ…」

茶髪の中年男「大丈夫、安心しろ、おれは強いから」

茶髪の中年男はそう言いつと、青年の頭に手をおき、まっすぐな目で青年を見つめる

黒髪の中年男「…わかつた…、絶対に死ぬなよ…？」

茶髪の中年男「わかつてるって」

黒髪の中年男「…じやあ、俺がいない間、デジタルワールドを頼んだぞ

…」

そういうと、黒髪の青年はポケットから不思議な形をしたケータイのようなものを取り出し、近くにあった木にかざす。すると、木の

前に光の穴が現れる

黒髪の青年「いつになるかはわからないが、俺は必ず戻つてくる…、だから、絶対に死ぬなよ…？」

茶髪の中年男「おいおい、いつたい何回言いつんだよ」

茶髪の中年男は笑う

黒髪の青年「それだけ心配だといひただ…」

茶髪の中年男「そうか、だが安心しろ、俺は絶対に死ない、だから、お前も頑張れよ…」

黒髪の青年「ああ…、じゃあ、また会えると信じてる…」

黒髪の青年はそういうと、光の穴の中に入つていぐ。すると光の穴は消える

茶髪の中年男「炎真<sup>えんま</sup>…、すべてはお前にかかりている…」

茶髪の中年男はそういうと、その場を去る

## ～プロローグ～（後書き）

いつも、みなさんはじめまして、この小説の作者の 大学芋  
です。

とある「デジモン」の小説を読んでいたら、自分も小説を書きたくなつてしまつて、書いちやいました！

自分は小説を書くのが初めてなので、かなりぐだぐだになると想いますが、温かい目で見ていただけると嬉しいです。

では、また次回、お会いしましょ？

# 第一話 ～冒険の始まり～（前書き）

ども、大学芋です

出だしのせりはあんまり深い意味はないんで気にしないでください

では、第一話ぜひ最後まで読んでください

第一話、スタート！！

# 第一話　～冒険の始まり～

JRは東京都にあるとあるマンション

その一室から朝早くから叫び声がする

204号室  
斎藤家

？？？ うわああああああああああああああ！？

青年はいきなり叫び声を上げながら起き上がる

？？？ — あれ？ 夢？

もう詰らば  
盡年は返りを<sup>ヰ</sup>日<sup>ヰ</sup>日と累減す

# この青年の名は斎藤 裕

高校1年生である

ユウ(何だつたんだ?今の夢は...)

じのせらうかほ悪夢を見ていたらしい

枕や服が汗でひっしょりだ

するとキッチンの方から母親の声が聞こえてくる

母親「ユウ? 朝から大きな声出してどうしたの?」

するとコウは汗でびしょびしょになつた服を着替えながら答える

ユウ「何でもない！」

母親「そお～じゃあ早く学校に行く準備しなやこ」

「ウ わかつてゐる」

母親「あ、そうそう、春奈ちゃんもう外で待ってるわよ」

ノウ「まごー! ?」

母親の言葉を聞いたとたんユウの顔色が悪くなる

ユウは急いで着替え、机に置いてあるゴーグルを首に掛け、リビングへ急ぐ

母親「ユウ、朝ご飯は？」

「ううん、今日はいらない」

そつとくは仏壇の前にいく

仏壇にはオールバックで茶髪の中年男の写真と二つのグローブが置いてある

...תְּמִימָנֶה וְעַמְּדָה...

や、うれしいで玄関を出る

「ウ「じやあこつてや…」

？？？」おや～い（怒）」

と声が聞こえるとユウ目掛けてカバンが飛んでくる

コウ - あふない (汗)

それを五つはしきがんである

机の前には髪を2つにまとめた茶髪の少女が立っていた

# この少女の名は小林春奈

ハヤのケラスメートであり幼なじみ

エヴ・ハルナ……このかはん当たるとけ……」痛しんたけど（汗）

ハルナ「なんのこと知らないわよ！」  
待たせるユウが悪いんだから（怒）

ハルナはそう言つと投げたカバンを取りにいく

二〇一  
「はあ…」

ユウは深くため息をつく

ハルナ「コウ? なにしたの? もこもくよ~。」

コウ「へ?」

気がつくとハルナはすでにエレベーターに乗っていた

コウ「はやつー。」

ハルナ「じゃ、先に降りとくから がんばって階段で降りてきてね」

「

やつぱりとハルナは先にエレベーターで降りていった

コウ「おこ、ちゅつめ...」110階何ですナビ...」

「ひしてコウは20階から1階まで階段で降りていくなってしまった

～通学路～

コウ「あ、足が...（涙）」

コウは両足をもみほぐしながら歩く

ハルナ「全くだらしないわね~」

コウ「誰のせいだと想つてるんだよ...」

すると後ろから黒髪の青年がきて、コウの肩をポンと叩く

？？？「よつ、朝から大変そうだな（笑）」

ユウ「お、キヨウヤ！」

ハルナ「あ、キヨウヤ おはよ」

二人からキヨウヤと呼ばれるこの青年の名は荒川

荒川 恭弥あらかわ きょうや

一人のクラスメートでユウ達の親友である

それともう一人…

？？？「ハルナちゅわあ～ん？ あいたかったよ～ん」

金髪の青年が両手を広げハルナの方に走つてくる

ハルナ「はあ… うざい！」

そう言つとハルナはカバンを投げつける

？？？「ハルナちゅわあ～…ぐへえ！」

ハルナが投げたカバンはうまいぐわいに金髪の青年にヒットし、金髪青年は氣絶する

ハルナ「ふんつ」

キヨウヤ「あははは…」

今氣絶している金髪青年の名は大谷 智也

おおたにともや

ユウ達のクラスメートであり親友

ハルナに恋心を持っているが相手にされない

ハルナ「こんなバカはほつといて早く学校いくよ」

そう言つとハルナは先に歩き出す

ユウ「キョウヤも早く行くぞ」

キョウヤ「あ、うん」

そつまつてユウ達も歩き出す

トモヤ「…………」

（学校 校舎内）

トモヤ「ハルナちゃん（涙） 僕を慰めて～」

トモヤはあの後ダッシュで追いついたのである

ハルナ「はあ……疲れる……」

ユウ「だな」

やつ血こながりコウは教室のドアを開ける

するひと…

黒髪の少女がコウにむかって走つてくる

? ? ? 「コウ～？」

コウ「ゲッ！？」

? ? ? 「コウ～　会いたかったよ～」

そつ血うつと黒髪の少女はコウに抱きつく

今コウに抱きついてきた少女は鈴菜志  
玲奈すずなしれな

中一の頃からコウと同じクラスである。いつも見えてても弓矢の腕は  
全国2位

ハルナ「ちょっとーあんたたち離れなさこよーーー！」

ハルナは無理やり一人を離さうとする

レナ「いやー　絶対はなれないー」

レナは離れようとしてしない

コウ「レナっ。ちょっと、離れろつてーーー！」

レナ「ん~、コウがそういうふんだつたら……」

セツヒツヒツヒツ、ユウから離れる

ハルナ（じこつ、ムカつく…）

トモヤ「ハルナちゃん…」

ハルナ「あんたはしつこいのよおおー！（怒）」

そう言つとハルナはトモヤをカバンで殴り飛ばす

トモヤ「なんで…、俺、だけ…ガク」

やつぱりトモヤは氣を失う

キョウヤ「ははは…」

とかなんとかしているうちに担任が教室に入つてくる

（ガラガラガラ…）

担任「お前ら早く席につけ～」

ユウ達はみなそれの席に着く

担任「え～、実は今日からこのクラスに転校生が来る」とになつた  
んだ」

生徒A「マジか！？」

生徒B「楽しみだな～」

トモヤ「先生～質問です～その転校生は女ですか？」

担任「残念、男だ」

トモヤ「何～？」

するとクラスメイト達は笑いだす

ハルナ「ばつかみたい…」

ユウ「アホだろ…」

担任「みんな静かに～じゃあ転校生を呼ぶぞ、入りなさい」

すると、黒髪で首にゴーグルをかけた青年が入ってくる

担任「え～、この子の名前は赤嶺 炎真あかみねえんまだ、みんな仲良くしてやれ  
よー」

生徒達「はーい」

ユウ（ヒンマつて言つのか…、とか首にゴーグルつて俺とかぶつて  
んじやん…）

ユウはそんなことを考えながらエンを見ていると田代が立つ。

ヒンマ「…」

「…」

（やまつ、田井ひさしつたしーー、ビーント、とつあんぱー…）

ユウはヒンマでお辞儀してみる

が、ヒンマは違つていつもをむき、ユウのお辞儀をスルーする

ユウ（スルーされた、スルーとかマジ泣けるぜ。）

担任「じゃあヒンマ、お前の席はあわせだからな、」

担任は一番後ろの左いた席を指す。ヒンマが指定された席に着く

担任「じゅあ今から朝のホームルームを始めるだー！」

ユウ（はあ、ダルつ）

ユウは居眠りを始める

ヒンマの様子をずっと見ていた

ヒンマ（あこつが…）

（休み時間）

ユウ「はあ～、疲れた～」

ユウは頭を机に乗せながら囁つ

ハルナ「ずっと寝てたくせになにが『疲れた』よ」

ユウ「俺は机に座ってるだけで疲れるんだよ」

レナ「だったらレナが癒やしてあげる?」

レナはユウに後ろから抱きついてする

ユウ「やっぱつ

そう言つと、ユウはレナをよけて、ダッシュで教室から出る

レナ「逃げないでよ~」

レナもユウを追いかけ、教室から出る

ハルナ「ちよ、あんた達待ひなさいよー」

ハルナもユウ達を追おうとするが、田の前にトモヤが現れる

トモヤ「ハルナちゅわあ~ん、俺と楽し……」

ハルナ「邪魔!…！」

トモヤ「今日で…三回…田… ガクッ」

トモヤ「今日で…三回…田… ガクッ」

やつ言つとトモヤを殴り飛ばし、教室から出る

やつまつたアササガホ氣を失つ

キョウヤマキアドンマイ

キョウヤは笑顔でやつまつと、みんなの後を追つて教室から出る

～校舎内 廊下～

レナ「コウ～ レナが癒してあげるよ～」

コウ「だからこいつで叫んでるだろ。」

コウはそつぱびながら曲がり角を曲がる

すねじてそこへコウがいた

コウ・コウマ「…」

コウヤジドン

廊下内に痛しうな音が響く

コウ「イテテテテ…」

コウはおでこを抑えながら立ち上がる

コウマ「…」

エンマも同じくおでこを抑えながら立ち上がる

するとそこへ、レナが走つてくる

レナ「ちょっと、二人とも大丈夫!…?」

ユウ「大丈夫……じゃないかも」 泪目

ユウ「ううと、ユウは頭を抱えてしゃがみ込む

エンマ「俺は…… 大丈夫!…」

しかしエンマも涙目である

ユウ「確かにエンマだったよな? 本当にめんな

ユウは顔をあげて言ひ

エンマ「… 大丈夫…」

そういうとエンマは教室のほうに出て出し、ユウとエンマがすれ違つ

エンマ（…放課後…、パソコン室で待つてる…）

エンマはすれ違ひながらユウにしか聞こえないほどの中声でそうこう

ユウ「んえ?」

ユウはいきなりさう言われたことびっくりし、声が裏返る

するとそこにハルナとキヨウヤがやってくる

「ヤハウカ」ノウヘビがしたの？

キョウヤはさつさやれ違ったエンマとコウを交互に見ながら尋ねる

「まあ、いりいろとな……」

（「あ、きのこで…まさか…よひだし…あい…俺をノンノンで…」  
コボコにする氣なんじや…）

「かほれに抱き合はれて死んでいた

ハルナ「ユウ...」

ユウ「え? 何?」

ハルナ「鼻血出てるよ?」

גַּת־אֶשְׁתָּוֹן

コウが鼻を触ると、確かに鼻血が出ていた。コウは手で鼻血をぬぐう

ハルナ「ちよつ、ハンカチぐらい持つてないの？」

ウ「うん」

ハルナ「全く…、しょうがないわね～」

そう言いながらコウに真白なハンカチを渡す

コウ「おおーサンキュー」

そうこうと、ハンカチを受け取り、鼻血をぬぐつ

コウ「ちやんと洗つて返すよ」

ハルナ「いや… もう返さなくていいから… 血付いてる…」

コウ「あ、そう。じゃ、ありがたくいただくぜ」

そういうとハンカチをポケットに突っ込む

キョウヤ「じゃ、教室に戻るか」

コウ「よっしゃ、俺が一番だ……！」

そうこうとコウは走り出す…が、滑つて転んで地面に顔面を打ち、  
また鼻血を出す

一同「……」

（放課後 廊下）

本日は、トモヤが早退（ハルナが殴ったため）で、レナが弓の稽古  
といつことで先に帰り、コウ、ハルナ、キョウヤの三人で帰っている

キョウヤ「コウ…、お前いったい今日一日で何回鼻血だすんだよ…」

？」

ユウ「5回…？」

ユウはあの後も、体育の時間にサッカー・ボールを顔面で受けたり、理科室の臭いを嗅いではいけない物質の臭いをかいだりして、鼻血を出していた。

ほんの数分前にも、壁にぶつかって、今も鼻血を出している最中である

ハルナ「ユウ？私があげたハンカチの色、何色だったか覚えてる？」

ユウ「え？白？」

ハルナ「なのに何！？」このハンカチの色は！？真っ赤っかじやない！！！」

ユウがもらつたハンカチは鼻血のせいであつて赤に染まつていた

ユウ「だつてしかたないだろ？鼻血出ちやつたんだから」

ハルナ「出しそぎよ…」

キヨウヤ「まあまあ、そんなに怒るなつて」

キヨウヤは間に入りハルナを落ち着かせる

ユウ「短気は損氣だぞ」

ユウはキヨウヤの後ろから顔を出してそつとつ

ハルナ「余計な御世話よー!」

ハルナはそう言いながらコウの顔面を殴る

すると、止まりかけていた鼻血がまた噴き出す

コウ「こいつええええ!」

コウはそう叫びながら鼻を押さえる

キョウヤ「あ~、やつちやつた…」

ハルナも怒りが収まり、態度が一変する

ハルナ「ああ、またやつちやつた!コウ!…?大丈夫!…?」

コウは真っ赤なハンカチで鼻を押さながら言つ

コウ「痛い…」

ハルナは深々と頭を下げ謝る

ハルナ「ほんとー」「めんね」

コウ「いや、エントリーブックかた時と比べたら…、あー…せっべ  
!…すつかり忘れてた!…!」

「ウはせりあつたつて感じの顔をする

キョウヤ・ハルナ「どうしたの？」

「いや、実はさ、俺エンマに呼ばれてたんだった。つーわけで二人は先帰つとこで」

そういうとコウは鼻を押さえながらパソコン室へダッシュする

キョウヤ「ひら

ハルナ「こいつらじゃ二

キョウヤ達は適当にコウを見送る

～パソコン室～

「しつれーしまーす」

「やつ言いながらパソコン室に入る

「待つてたぞ……斎藤裕だな……？」

「一番奥にあるパソコンの席に座つていた

「え、あ、うん……そうだね……」「あれ？ 向でおれの名前知つてんだ？」

Hンマ「ゴウ……お前は『デジタルワールド』の守護者に選ばれたんだ……」

ゴウ「え……あの、『壊して』の意味が……よくわからないんだけど。」

（なんだこいつ……まさか厨二病……？）

Hンマ「今はわからなくて、もいすれわかる……」と、うなずく前に、H  
おれと一緒に『デジタルワールド』に行つてもいい……」

Hンマは、やつぱりとポケットからケータイのようなものを取り出し、パソコンにかざす。するとパソコンが光りだす

Hンマ「向を壊つてある……行くぞ……」  
ゴウ「えつ、ちゅー……まつ……」

やつぱり、Hンマはゴウを引つ張る

ゴウはHンマと並んで張られてパソコンに吸い込まれていった

～～～～～

ゴウ「うーん、お……重い……」

何者かがゴウのお腹の上を跳ね回る

ゴウ「うーん、お……重い……」

ついでに、この辺りを覗いてみると、

? ? ? 「あは  
起きた?」

すると謎の生物はコウの顔に自分の顔を近づける

ユウは自分のお腹に乗っている生き物に気づく

ପ୍ରକାଶକ

「うわー！？」

ユウは急いでその場から離れる

? ? ? — 逃げないでよ、ユウヘン

謎の生物はそう言ふと正面に飛ひかかるでくる

ニウ うわああああああああああああああ ! ? 「

丘では謎の生物に飛ひかかられて、その場に倒れる

すこと待つてたんだよ

謎の生物はユウのお腹の上に乗り、スリスリとユウの体に自分の体をこすりつける

ユウ「な、な、な、何なんだこいつ！？」

やるといつて木の隣からHンマが現れる

Hンマ「やつと起きたか…」

ゴウ「Hンマー…」

??.??.「あ、Hンマだ～」

やつと、謎の生物はゴウのおなかの上からおつり、Hンマの頭のまへで始める

ゴウ「H、Hンマー？そこ、こいつたい何なんだ！？」

Hンマ「ここはお前のパートナーデジモンだ…」

ドルモン「俺、ドルモン よひじへな、ゴウ」

ゴウ「は？なんだよ、ジモンって…？お前が言つてゐるわざわざ  
からなこぞ！」

ドルモン「俺が説明するよ。」

～数分後～

「ドルモン」とや～わけ

「えへと…つまり、お前は『デジモン』っていう生き物で、お前たちが住んでる世界が『デジタルワールド』…」

「そう」

「で、その『デジタルワールド』のが崩壊の危機に陥っていると…」

「そう」

「で、なぜかはわからないけど俺の力が必要と…」

「うん、まあそーゆーつこと」

するとユウはじばりく考え込む

「よし…わかった！俺が『デジタルワールド』を救つてやる…！」

「ほんと…？」

ドルモンは田を輝かしながら聞く

「ああ、ホントだ！俺の辞書に一言と二つ文字はない…」

「決まりだな…」

するとユウのポケットが光り出す

「うわー！なんだー？」

ユウはポケットから光を放ているものを取り出す、するとケータイが光っていた

ユウ「ケータイ？」

するとケータイはすぐたを変える、

ユウ「なんだこれ？」

ユウの手には赤い色をした謎のものが握られていた

エンマ「それはデジヴァイスだ…」

ユウ「デジヴァイス？」

ドルモン「そのデジヴァイスってのはね、選ばれた者の証みたいなもんだよ！」

ユウ「へ～、そうなのか…」

そつ言いながら、ユウはデジヴァイスをいじくる。

ピッ！

ユウ「あ、やべっー？なんかおしちまったー！？」

するとドルモンがデジヴァイスの中に吸い込まれる

ユウ「あー入っちゃったけびーー！」

エンマ「それはデジヴァイスの機能の一つだ…」

ゴウ「へー、すげーなーで、ビーカー出せばここのは…」

エンマ「コローダと比べば出せば…」

ゴウ「へー、じゅ、コローダ…」

ゴウはデジヴァイスを前に深き出ししながら呟く。するとドルモンが出て来る

ドルモン「ゴウ～（涙）こきなり閉じ込めるなんてひど～（涙）  
」

そつまにながりゴウの呟しがみつく

ゴウ「あせませせ…、じめんな。」

エンマ「デジヴァイスには他にもこんな機能があるが、続きは明日にしよう…」

ゴウ「そうだな、暗くなってきたし…、つーわけでドルモン、今日はもうサヨナラだ」

ゴウは足をしがみついているドルモンを手離さないとする

エンマ「何バカな」と言つてゐるんだ…、ドルモンも連れていくぞ…

ゴウ「え？」

エンマ「お前が家につれてかえつて面倒見るんだぞ…」

ドルモン「よろしくな」

「ウマジかよー?」

「…やべ行へぞ」

そう言つと、エンマは木にデジヴァイスをかざしゲートを開く。そしてそこにコウを投げ込み、自分も入る

こうしてユウたちは現実世界へと帰つて行つた

その様子は、影からずつと見ている者がいた

？？？「エラバレシ」「ドモ…ハイジョスル…」

S T O B e C o n t i n u e d }

## 第一話 ～冒険の始まり～（後書き）

～キャラクター紹介～

名前 斎藤裕（サイトウコウ）

性別

一人称 僕

パートナー ドルモン

性格 外交的で、誰とでもすぐに打ち合いでしまう才能を持つている

勉強はかなり苦手だが、運動はそこそこできる。しかし力ナズチ

～パートナー～

種族 ドルモン

性別

一人称 僕

性格 基本マイペースなので起床時間はかなり遅い

ユウにデレテレ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6773x/>

---

～XデジモンファーチャーズX～

2011年11月11日03時25分発行